

## 令和6年度第4回社会教育委員会議録

- 日 時 令和6年6月18日（火）  
午前10時から正午まで
- 場 所 徳島県庁10階 大会議室
- 出席者 徳島県社会教育委員：11名  
馬場委員長、阪根副委員長、赤松委員、石倉委員、泉委員、  
伊藤委員、榎本委員、蟹江委員、児嶋委員、横田委員、  
横島委員  
教育次長、生涯学習課長、生涯学習支援課長、事務局他：6名

### ■会議概要

- 1 開 会
- 2 徳島県教育委員会あいさつ
- 3 議 事
  - (1) 令和8年度提言について
    - ①スケジュールの確認
    - ②「徳島県教育大綱」・「徳島教育振興計画」説明
    - ③「提言テーマ」について
    - ④「提言骨子」について } 協議事項
  - (2) 今年度の会議・研修会の予定について
  - (3) その他
    - ①第46回中国・四国地区社会教育研究大会徳島大会について
    - ②その他

### 議事（1）③④社会教育委員会議提言テーマと骨子について

馬場委員長

事務局より、提言のテーマと骨子の設定について話し合うため、昨年度の第2回と第3回の会議でのご意見をまとめたものの説明があった。

今後は、いただいた意見をまとめ、（委員が交代する）次年度に送っていきけるようなテーマ案と骨子案というものを、まとめていこうとする方向性となる。今後、どういうテーマで、どういう骨組みで議論を進めていくかということに関して、皆様から意見をいただければと思っている。これまでの意見が資料の中に書かれているが、参考にしながら、追加すべきものや、また、これまで気がつかなかったことについて、発言をお願いします。

赤松委員

この提言策定のスパンが2年から4年と長くなったということで、1年、2年先というよりも、さらにその先、3年、4年、5年という先のことを見据えた上での提言が必要になってくるだろう。

先日も報道であったが、消滅可能性地域と呼ばれるようなところ、今非常に人口減少がどんどん進んでいて、地域の衰退が予想以上に進んでいる。自分が

不安に思うのは、このような状況の中、これからの地域をどのようにつくっていくかや、人や組織をどのようにつなげていくかという社会教育の果たす役割に、どうコミットしていくのかというところだ。やはり地域が衰退していくことは抗えない現実だと思う。そのことを前提にその現状をどういうふうに受け止めて、それに対してどういうふうに社会教育の立場からそれに関わっていくかを考えているところ。

また、それとは別に私が見る限り、日々の社会教育、生涯学習に関する活動に関して、非常にいろいろな場面で充実した活動が行われているというふうに思っているところ。特に私自身、(県教委の)「とくしま親なびワークショップ」の活動に参加しているが、今月(6月)、ワークショップの方が3回と、それから研修会を計画してもらい非常に学ばせていただいた。やはり幼い子どもさん等の子育てをされている保護者の方たちとのワークショップの中で、いろいろな不安や心配を抱えて子育てされている状況がよく分かった。そういうところを今まで以上の力を入れてやっていく必要があるというふうに考えている。

馬場委員長

今度の(国の)教育振興基本計画の中で、「2040年以降の社会を見据えて」という部分があるが、どうなっていくのか5年先でも読めないような感じだ。日本は人口がどんどん減っていきこのままでは、日本の国自体が維持できないという状況の中で、外国人をもっと呼び込むような政策も考えられているところ。そうすると今後は、どんどん地域も変わってくるということは逃れられない。日本人だけで地域を運営していくことが難しい時代が変わってくると思っている。そういうことも含めて、今の子どもたちをどう育てていくかということを考える必要がある。

石倉委員

今、赤松委員の発言を受け止めて、やはり本当に先のことを見据えた取組というのがなくてはならない中、危惧されている状況は、現実にそこまで来ているような気がする。地域における連携の重要性を意識しながら、やはり、特に婦人会活動は会員だけの取組ではなく地域に根差したものなので、地域の様々な方に取組や活動を理解してもらったり、一緒に活動する取組をしている。

地元活動だが、本年度は防災に関して地域の防災士の方、行政、各学校、特に今年は小学校とPTAを巻き込んでの防災の取組を1日限定であるが、9月に実施する方向で計画している。防災の取組に関しても、行政の考え方、防災士の考え方、学校や地域の方々の考え方や、また、災害への備え方なども、それぞれ全然違う。こうした中、協力しあう関係をどういうふうに地域に広めていくかということが大事。先日、婦人会と議会の話合いを行うなど、議会からも行政に働きかけてもらうということも行っている。

もう1点はICTの活用だが、先日も総合教育センターの方でチャットGP Tの講習があつて、私も参加させていただいた。そういう先進的なことも取り入れながらの学習を地域に広めていくということも大事である。

馬場委員長

婦人会は、地道に地域で頑張っている優れた社会教育の団体だと思う。そういう活発な活動をしているところと、他の人や団体がどうつながっていくかが

大事で、議会とつながるということも非常によい。政策に活かしていくということは大事なことだ。

特に、最近の子どもたちが議会で勉強するという機会をつくっているところもある。実際に物事を動かしていくようなシステムをどうつくり上げていくかということをおさいうちから学ぶということも大事だろう。

泉委員

(事務局より) 提言のテーマと骨子の設定の在り方に関する説明を聞いて、思ったところを話させていただく。

1つは提言テーマ関連の資料にあった「学びと実践が織りなす」という言葉が非常によい。私たちは、テレワークの推進をしている過程で、講座とかセミナーをしているが、学びの機会をつくることは比較的容易だが、学びを実践する機会を作るというのはとても難しく、それ(学ぶことと実践すること)をまた繰り返すということの大事さというのも非常に理解しているところで、「学びと実践が織りなす」という言葉が非常にこれからめざすべき姿だなというふう考える。

もう1つは、講座をしているとよく受講された方からお伺いするのが、県とか市とかから受託した講座などをしている際、「なぜ参加したのですか」と聞くと、やはり、県とか市がやっている講座なので安心して受講ができるという言葉が非常によく聞く。逆の立場で、私たちもその点(安心して学べる講座)をすごく伝えている。安心して受講できる環境というのが地域にあるべきだが、もしかしたら若い世代では、地域ということがイコール安心できる場所でないのであれば、安心できる状態にして、そこに学びというものを載せていく作業が、地域における学びの活性化には必要なのだろうと思う。

馬場委員長

「学び」と「活動」をつなげるというのはなかなか難しい。まわりを見渡しても、学ぶ機会というのは、例えば公民館などで学ぶ人はたくさんいるのだが、学びが実際の活動に結びついていかないというのが非常に残念なこと。それをつなげていくことが行政の重要な仕事だと思う。ぜひそんなことも今後、皆さんの意見をいただきながら考えていければと思う。

また、先ほど(石倉委員の意見)の後半の部分で言われたDX(デジタルトランスフォーメーション)について、学校教育ではかなり力を入れているが、社会教育の場合は進んでいない。ハード面の整備も遅れているのが実態であり、若者が地域でなじめないという場合には、(ICT環境を整備し)それらをどう活用していくかというのも重要な視点ではないかと考えている。

伊藤委員

子どもは、住民の一番身近な学習の拠点である公民館ということで、生涯学習講座等の充実を図り、「この講座に参加してよかったな」と言ってもらえる、満足度の高い公民館活動を常々考えており、今年度も新しい講座を増やして住民の方からのリクエストに応えようと取り組んでいる。今年度は、新しく英会話の講座や、ラジオ体操、また介護予防講演会などを行っており、市民がこれ行ってみたいと思う講座を開設することで利用者も増えていき、「公民館があってよかった」と言ってもらえるところにしていきたい。そうすることが1つは、地域の活性化や町づくりにつながっていくとも思う。

私どもは、吉野川市でいうと中央館というところでもあり、多くの方が利用する。そんな中で、公民館がより身近なものになるよう、イベントも開催している。例えば、3月には「子ども元気祭り」を開催。この催しでは、雨であったが親子合わせて1,000名の参加があった。さらには、いろいろな物品の提供や食材を提供する婦人会や天寿会の参加もあり、若い世代の方とどう結びついていくかという点で、若い方から高齢者まで集まるというのは非常にいい機会だと思った。地域づくりにはそういうネタづくりが必要なのかな、というのを改めて感じた。

また先日、大雨の日だったが、私どものイベントでNHKの交響楽団の金管五重奏団の方を呼び、鴨島公演を開いてもらった。615席のホール会場で約500席が埋まった。著名なプロの演奏家が来てくれるということで、小学生や中学生の金管演奏をしている生徒たちもたくさん集まってくれた。公演の前日にそのプロの演奏家の方々がワークショップを開いてくれ、地元の小中学生に手ほどきをしてくれるという良い機会も得られた。校長先生からお礼の言葉もいただいたが、やはり良いもの、本物を見せる、聞かせる、体験させる、そういうことが一番子どもたちにとっても新鮮な学習になったかと思う。そして、これが公民館を利用する一歩めの手がかりになり、「次にまたこんな機会あったら行きたい」と考えてくれたらいいなと思っている。

今後も、これまで培ってきたような地域との関係性を活かして、また新たなチャレンジとして催しや講座などを考えていきたい。夏休みには、子どもたちに向けたいろいろな子ども教室、科学実験・観察教室も用意しており、子どもたちに学校で学べないものというか、学校の授業以上のものを学んでもらえたらなと思っている。公民館の活動が地域と学校との橋渡し役になっていくという重要な役割もあると考えるので、その部分で協力してくれる人を増やし、それで地域づくり、また学校との協働関係をさらに活発にさせていけたらいいと思っている。

また、前々から公民館のWi-Fiの機能が脆弱であるということが何度も出ていたところで、これについてはこの会議で指摘を受けたことも、市の教育委員会には伝えている。この間も「防災の観点から考えたら、Wi-Fiがあったら（災害で電話回線が切断されてもアプリケーションやSNSにより）電話もひょっとしたら使えるかもしれないということで、ぜひ市長部局の方としっかり話し合っ」とか、それから最近、モバイルルーターですかね、そのときだけ使えるようなもの、「こんなの月額で借りてやる方法もあるよ」などというような話をしてきたところである。ここで聞いたことは、また市に持って帰って市の教育委員会に伝えていき、そういう意味でも行政とタイアップしていかなければならないなと思っている。

馬場委員長

やっぱりそういう新しい講座を組み立てるには、地域で今、何が問題になっているのか、例えば健康づくりであれば、学んだ成果をどう活かしているかというか、元気な人が増えてきたというような、成果への評価というのが非常に大事だなと思っている。そういうものを身近なところで学習すると次に活動へ

とつながっていくのであり、絶えず、社会教育施設の職員のような人たちは地域をきちっと見極める目というのが大事で、我々自身もそういう地域のニーズに応えるという視点を持ち、「今、ここではこういうことが大事だよ」というところをきちんと発言していく姿勢が、地域において他の人とつながっていく上では非常に重要なことになっていると感じた。

私は、駅前のアミコビルで、インクルーシブカフェというカフェをさせていただいている。県外の出身であり、徳島の昔というのを知らないが、地元の方に聞くと、もう 30 年前と変わっていないとか、いやさらに衰退しているという声も聞く。さらに、自分たちの時代はすごく良かった。いろいろなものが、駅前には集中していて、40 代・50 代の方は学生のときには駅前をよく遊んだという話を聞く。さぞかし楽しかったんだろうなと思う反面、今の子どもたちに何もない駅前を渡していいのか。自分たちは良い時代を過ごして楽しかった記憶があるが、今の高校生たちは駅前に対しどんな記憶を残して大人になっていくんだろう、そういうことを県外の私としては考えるところがあり、また駅前で仕事をしている自分だからこそ、なおのことこれは深刻だなと思っている。行政だけではなくやっぱり地域の人々も関わって、「さあ駅前をみんなでよい方向に動かそう」という大人の動きがあれば、子どもたちの目にそれが記憶として残されていくのではないのかな、というのを考えている。

じゃあ、アミコビルで何ができるかというのを、私も今、日々課題とし取り組んでいる。現在、「多様性」「SDGs」、そして「ウェルビーイング」の言葉が行き交っているが、言葉だけが先走ってしまっていて、実際じゃあこれだよ、というのがやっぱりなかなか見えにくい。先々長期を見据えての「社会教育委員会議の提言」というところで、世の中がどう変わっていくのかというのも、ちょっと考えながら、今後の提言のテーマを決めなければいけないなというところがある。

私の関わる福祉という観点からとなるが、20 年間その視点から世の中を見てきた私なりの考え方からすると、「福祉の対象は高齢者や障がい者ばかりではない、みんなだよ」というところで、福祉は結局みんなのそばにいないといけない。それぞれ一人一人の立場や環境、生き方、そういうところで苦しみが生まれた瞬間に振り向いたら福祉がそばにある、というのが私の中の結論。それに向かって、今活動をしている。

また、今、カフェでは何をしているのかというところで、先日、お話をいただいたのは産前産後の「うつ」についてで、自殺者が徳島でも増えているということをお聞きした。また、「引きこもり」の問題もまだまだ増え続けている現実があって、そういうところで、カフェを発信の場所、そしてつながりの場所にしていかなければいけないなど。それが、私が思う福祉であり共生社会なのかなというところもあり、そういったところで動いている。

そして、以前お話した北陸の震災に関しても、私も 1 月 11 日に、支援物資を運んできたが、「2 段階輸送」のこと、現地との連携、地域がいかに町を守って人を守るのかというのを目の当たりにした。そうしたことをカフェで子

どもたちに伝え、さらに障がいのある人たちとの共生について伝え、「いつか自分ごとになるんだよ」ということを重い話ではなくて、カフェという環境で伝えて知ってもらおうということ。無知が一番の凶器であり、いけないことだと思うので、まずは知るということをカフェの活動で地域に広げていけたらよい。それぞれの立場それぞれの考え方の中で知ってもらおうということ。

さらに、本年度は、小学生に向けたインクルーシブ教育というものを実施しようとして動いている。夏休みに向けてカフェから幼稚園、そして小学校、学童保育、放課後デイサービスそれぞれの事業所にお声掛けをして、カフェで、遠隔操作ロボットとの交流、車椅子店員との交流、様々な活動をしている大人たちに来ていただいている講演など、そういったことを夏休みに企画しており、インクルーシブ教育についてまず知ってもらおうというところを、子どもたちにしていけたらと思っている。そしていつか周囲の様々な課題を自分ごとにとらえられるようになって、駅前の衰退に対し、「これはいいのかな」と子どもたちから声を上げ、行政を動かし、そして地域がそれぞれの課題に取り組むような動き方になればと考えている。

馬場委員長

話を聞いていて、私 10 年くらい前に徳島に住み始めた際は、駅前は若者が多かったと、今、あの子たちがどこに行ったのか、と忘れてしまった。今は子どもの数がどんどん減ってきている反面、問題を抱える子どもが増えてきている。そう考えると、多様性など最近はいろいろなところで強調されているにも関わらず、全くその（サポートされる）部分に触れられないというか、知らない人がいるということが非常に問題。これだけ人がいなくなってくると、知り合えなくなり、つながり合えなくなるので、これは何らかの意図的なつながり合うための機会が必要になるのかな、とつくづくお話を聞いて考えさせられた。

蟹江委員

子どもの数が減っているというような話があったが、子どもの数が減っているということは、必然的に学校にいる保護者の数も減っているということになり、PTA活動において保護者の数が減っていることは、昔から続いてきたPTA活動を担うことが難しいという現状となってきている。PTA活動に対して消極的な意見が全国的にも多くなり、徳島県内でもPTA活動に対してネガティブな意見を聞くことが多くなっている。社会教育に関しても同様に、いわゆる親世代の人たちが社会教育の場に関わるということがどうしても難しい現状があるのではないかなと思う。共働きや、単身でお子さんを育てている家庭とか増えているので、社会教育の場にも出ていくというのがなかなか難しい、関わるができない。その分をどうやって補っていくのかというのがなかなか難しいのではないかなと思っている。

地元の鳴門市で、社会教育委員のワークショップがあって、そちらに参加したときの話。委員の方たちがどうしても高齢化しているので、社会教育でいろいろなことをやろうというとき、「もう少し若い世代の人たちに来てほしいんだけど、これをどう発信して、どう参加してもらおうようにしたらいいか」というような意見が多く出た。今、県教委の資料を見て考えたことは、SNSの

ツールを活用したり、効果的なメディアの活用などにより、いろんな世代の人に知ってもらえるような手段を取っていったらいいのではないかなと、若い人たちからその親世代、高齢者の世代まで知ってもらえるような活動をしていったらいいのかなと思っている。

また、防災という話もあったが、鳴門市PTA連合会では今年度、防災について、家族ぐるみで考えることができるようなイベントができないか、ということを検討している。昨年度、鳴門市が防災運動会というものをやっていたので、市の担当者にも相談して意見をいただき、何か良い形で鳴門市PTA連合会主催で、防災について多くの方に知ってもらい、また地域や学校ともつながっていただけるようなイベントができれば、ということで今計画中。こういう形でPTAとしても、どうにかいろいろな方とつながり勉強していくことができれば、と考えている。

また、地域の子ども食堂のお手伝いなども個人的にしているが、ここで防災備蓄のローリングストックも兼ねて備蓄のカレーを使って食事を提供したり、消防団の方たちにも来ていただき、クイズで防災について子どもたちに勉強してもらったり、消火体験をさせてもらったりということも企画して行っている。

機会を見つけていろいろな人に、様々な体験してもらいたいと考えているが、やはり親世代がなかなか来てもらえないという現状があるので、催しについてどう発信していくか。そして、参加していただくにも平日は仕事をしている、休日は休日子どもたちの習い事の送迎がある親世代にどう時間の都合をつけてもらえるか、なかなか難しい課題なのかなと思っている。

馬場委員長

PTA活動はこれだけ人が少なくなってくると昔どおりというわけにはいかない。今、PTAに入らない保護者というのかなり出てきているのも事実であり、連合会からも脱退するというPTAも結構あったりして、昔どおり形式的にやるとなるとどうしてもそうになってしまう。その時代や場所にあった変化をしていく必要がある。できる範囲でできることをやる。その上で、より多くの人に参加してもらえるような仕掛けを考えることが非常に大事。教育関係だけではなく、いろいろなところとつながりながら、関心を持ってもらえるようにする。他のところで好評であったイベントがあれば同じものを企画するなど、防災運動会もそうだけれども、いろいろなところと手を組みながらいろいろな人が興味を持ってくれるようなことがそこかしこにあると、もう少し人が集めやすいのかな、という感じがある。そういう意味で、お互いを知る機会のようなものが今後は本当に必要だな、というのをつくづく感じる意見だった。

児嶋委員

私は人づくりというところで2点お話しさせてもらおう。

最初に、馬場委員長が「人づくりを通じた地域づくり」と言われ、ちょうど徳島教育大綱を見ると、基本方針が「個性と国際性に富み、夢と志あふれる『人財』の育成」というふうになっていて、私の役割はこれかなというふうに思う。

一点目は幼児教育ということだが、前回の会議で子ども社会が分断されてい

るという話をさせていただいた。徳島はそれ程ではないが、都市部に行くとは授業料が義務教育のはずなのに「うん百万円」、給食は一流レストランみたいなところもあったりして、また、修学旅行は海外というような、そういう経験を積んでいける子どもと、やはり全くそうでない子どもがいて、徳島でもそういったことが進んできているかなと思う。去年、子ども家庭庁が発足して、保育所と認定こども園の方は子ども家庭庁の管轄に移行したが、幼稚園は文部科学省のまま残った。まずそこで分断されているという現状がある。

そして教育基本法には「幼児教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う」ということが文言にはっきり入っており、最近、重要だと言われているのが0・1・2歳児の保育。0・1・2歳児で非認知能力を培うことが、生涯にわたるその人の幸福感とか、社会的な成功とかそういうことにもつながっていくということが言われている。やはり保育所あるいは認定こども園が非常に重要。実は去年において、就学前の5歳児がどこの施設に行っているか、ということに関して、1位が保育所、次が認定こども園、幼稚園が3番目となっている。従来、徳島では幼稚園志向が非常に強くて、就学前には幼稚園という流れで一般的な感覚はあったが、今は半分以上の子どもは保育所、0歳から保育所に行ってそのまま小学校に行くという時代になっている。しかし、教育という視点を考えた時に、保育所というのはちょっと置いておかれたままのところがある。しかも一時期、小泉政権の時に待機児童解消ということで、何でもかんでも保育所に詰め込み、新しい保育所もどんどん認可したという流れの中で、園庭すらない保育所がある。近くに公園があったらそこ使ったらいいんじゃないかみたいな。しかも人が足りないから資格がなくても、ある一定の条件を満たせば保育所で働けるようになってきている。幼稚園はしっかりした国の基準があって、教員免許を持ってないと絶対に働くことができず、園庭もあればリズム教室もある。そこら辺がうまくつながらないかということ私は常々思っている。幼稚園にいる子どもだけしっかり教育をすればいいのではなく、そこには保育所があると、そういうところを教育にもっとつないでいけば、お互いに地域で一緒に育つことができるのではないかな。家庭的、経済的に恵まれている子どもだけがいい教育を受けていくというのではなく、いろんな子どもが保育所に来るので、そこも同じような教育を受けて、同じような体験をしていく、というようなことが実現できないだろうか、というように考えている。もう一つ問題になるのは無縁児と最近言われる、保育所にも幼稚園にも行っていない子どもである。少なくとも保育所に行っていれば保育を受けられるが、保育所すら行っていないということは様々な社会教育の情報も全く届かない子どもたちがおり、その無縁児に対してどうアプローチしていくか問題になっている。

それからもう一点では、「大学とか専門教育の意義」について。今大学ははっきり言って選ばなければ誰でも入れる時代になっている。何年前か前に、東京のどこかの大学が、中学英語の be 動詞をカリキュラムに入れているというのが話題になったがそれも現実。皆さんの世代では難関校と言われた大学ももう非常に入りやすくなっている。授業するとびっくりするぐらい漢字が読めな

いとか、そういう人たちがいる。社会的にはそういう人たちが結構揶揄されて、大学なんて行く意味がないんじゃないとか言われるが、だからこそ大学・短大の意義というのはあると思っている。中学ぐらいで勉強諦めてそれで学ぶことをストップしている人たちがもう一回、自分も社会の役に立てるのではないとか、学ぶことって楽しいなとか思ってもらえるような役割が、特に地方の私立の大学にはあると思っている。その中でアルバイトに明け暮れている人たちにちょっと視野を広げていただきたいということで、ボランティアの仕掛けを作っている。先月、榎本委員にも来てもらって話をしてもらい、福祉の概念がちょっと変わってきた、こんなに新しくなっているんだっていうことも感じてもらえたと思うし、視覚、聴覚支援学校の先生に手話を教えてもらったり、いろんなことを少しずつ混ぜて、どこかでも引っかかるものがあったら、そこを手掛かりにしてちょっと視野を広げてもらえればな、というようなことを考えている。私自身が社会教育的なことをやっているわけではないので、あまりえらそうには言えないが、そういった側面で何か少しでも力になることがあったらいいなと思ってやっている。

馬場委員長

十分社会教育されている。小さいうちからの分断というのは前回も先生が強調されたとおりの。私の家の周りを見ても、たいていの親は自転車の前と後ろに子どもを乗せて、保育所に毎朝、向かっているが、すぐ脇のところには幼稚園のスクールバスで迎えに来ている。かなり小さい頃から分断されている、というのが現実問題。これをちゃんと小さい頃から教育を受けられるようなシステムにどうすればしていけるのかというのは、子ども家庭庁が、もっと頑張ってもらわないといけない話だろうなと思うが、そこに何かを仕掛けられるようなことが考えられたら、もう少し世の中に明るい未来が見えてくるかなと思う。

横田委員

私の方からは、社会教育と学校教育の関係についてお話をさせていただこうと思う。

4月にいつも職員会議で先生方に、「今年こういうふうにしてくださいね」と所信表明じゃないが言わせていただく。今年はそのうちの一つに、「教育予算というのは限られているので、このようにコロナ禍が落ち着いて、いろいろな活動ができるようになった今、子どもたちの活動をお金がないからということで、止めてしまうことがないように、いろんなところで工夫をして見つけてくださいね」という、そういう話を教員の方々にしたところ、その話が非常に先生方の頭に残ったみたいで、ことあるごとに「校長先生、今度は何万円取ってきました」と報告をしてくれた。私も先生方に言うだけではいけないと思い、教育DXに関して、国が1,000万の予算をつけてくれるという事業をしていたので、それを去年、私どもで絵を描いて取りに行き、今年1,000万がつくことになった。PCを買ったり、「城ノ内ラボ」を作ったりとかそういう夢が広がっている。やっぱりお金があったら夢が広がる。ありがたい話。

そのお金を取ってきてという中で、(先生方が)いろいろな事業に関して目端を効かせていったら、絶対社会教育に行き当たるだろうと思った。いろいろ

な形で社会教育委員の皆様方がやっている活動というのが割と「リーズナブル」にいろいろやってくださっている。講演をただでやってもらえるとか、本当に素晴らしい事業が伊藤委員の公民館のところであるとか、多くある。それを学校にいる人間（先生方）はなかなか考えが至らない。ちょっとアンテナ立てたら絶対行き当たるというふうなことも言いたかったので、今回の（事業資金について先生方に工夫をしてもらった）ことはちょっとよかったなと思っている。

そういうふうな中で、社会教育と学校教育の関係についてということを考えて、学校教育における教育的な人材については、割とちょっと行き着いてしまったようなところがある。教員だけでこの学校というところをなかなか切り回せない時代になっている。実際のところは、例えば、講師の数が足りない、教員の数が足りない、教員が人気のない職業になってしまって、なかなか人材が集まらない。私としては非常に苦しいところ。私は教員になってこの方、1日たりとも飽きたことはない、素晴らしい職業だと思いながら毎日やらせてもらっているが、その魅力も伝えきれていない。そうした中で、社会教育の素晴らしい人材を教育現場で活かすつくさなければだめだと常に思っている。私も、10年前ぐらいから、この社会教育の仲間に入れていただいたが、その頃からすると社会教育的な要素が学校教育の中にだぶ入ってきたなと思っている。地域人材の方々、社会教育に関わる方々の力を借りなければ、多分今の学校は動かせない。そういうふうな中でやっている。

そのようにして力を借りて、今、中等教育学校、中学、高校というところにおいて、もう1回やらなければいけないと考えていることは、自分たちの頭で考えて、いろいろな体験、本物に触れるような体験をしたことを自信として行動できる、たくましい子どもたちを育てなければだめだということ。そのためには、「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」といった、探究活動が非常に重要。昨年、他県の中等教育学校をいろいろ見に行かせていただいた中で、本当にそれを身にしみて感じた。そこで探究活動を一生懸命やっている子どもたちが、勉強も頑張り、部活動も頑張り、いろいろなことに頑張る力をつけていって、そして羽ばたいていく、そして国を動かしていく人材となる。そういう子どもたちに育てていっているというのを目の当たりにした。

したがって、社会教育人材と学校教育との関わり、また、どういった子どもたちを育てていきたいか、そのあたりに社会教育がどのように関わっていけるのかというようなところも提言の中に入れてもらいたい。

私自身、今年で役職定年ということになり、来年から身の振り方というのを考えなくてはいけない。個人として考える中で、一番魅力的に感じているのは地域活動。これから、自分はどういうふうに地域を盛り立て、徳島県を盛り立てていこうかと考えながら生きていきたい。

馬場委員長

学校教育はかなり昔と比べて変わってきているのが実情。地域の人を「使い倒す」という横田委員の考え方が非常に重要になってきていると改めて思っている。ぜひ地域活動に携わることをお願いする。

横島委員

委員の皆さん方の話を聞くと、人のためにとかみんなのために働いておられる徳島県のトップランナーだなどと思って、本当に勉強になるというか、ここに来るとすごく身が引き締まり、頑張ろうという気持ちにいつもさせていただいている。本当に感謝。

私も学校を預かっている者として、地域社会と学校というのを切り離せないのを実感する。自分が学校経営していると、地域の人に助けられている、社会教育に関わるいろいろな方に助けられているというのは本当に感じている。

実はうちの学校には、私、25、6年前は教諭で勤めたことがあった。その当時の生徒は157人だったが、今年は78名になっている。半分になっている。ところが、先生の本数が半分どころか3分の1ぐらいになっている。私は実は徳島中学校というすごく規模の大きい学校の出身だが、多様な先生方に教えられた。25、6年前の本校にも多様な先生方がいたが、今は、地域の人に助けただけか、多様な教育を展開できない。それで、いろいろなところで、いろいろな場面で、コミュニティスクールや地域学校協働本部の皆さんなどに助けられている。掃除についても、建物は大きい子どもが少なく時間内に半分ぐらいしかできない。だから、草が生えたら「桜草の会」という地域学校協働本部の方々が来て、さっと取ってくれ花壇を整備してくれる。いつも花がいっぱい咲いて、本当に美しい環境で授業ができています。それから木が生い茂れば教室が陰になるというので、大きなチェーンソーみたいなので伐採してくれる。それから読み聞かせも、鳴門教育大学の先生から研修を受けた上でくださっている。そういうふう子どもたちの未来に投資しようっていう考え方の地域の方々に、今学校は助けられている。

先ほど泉委員が「学びと実践が織りなす」という言葉の意義、研修したり勉強したことがどういうふうに戻っていくかについて発言があった。今、地域の方々の中で、経験値が多い方が学校に入ってくさっているの、学んだり経験をしたものを学校にぜひ息吹として入れていただくと、本当に学校がまた活性化すると考えている。

子どもと地域が結びつくことで、地域の方々からすれば、「地域は子どものために」という無償の愛ではないですけど、そんな気持ちになる。また、子どもたちからすれば、「地域の人たちにお世話になっている」ということについて「ありがとう」という言葉や気持ち、それはやがて地域への感謝とか、地域を愛するとかにつながっていくと思う。また、そういうことをきちんと教えるのが我々教師であり、地域と学校の接点を大事にしたいと思っている。学校現場には様々な難しい問題があるが、PTAとかコミュニティスクール、地域学校協働本部などが一体となって子どもの教育に携わっていくというのが本当に実感として大切だと感じている。

また、本校では、PTAを中心に婦人会等の地域の方々と防災を大きくやろうという、そんなことも計画もしている。ちょうどPTA会長が市役所に勤務し、石川の被災地の支援にも行かれた方なので、そういうふうな地域の人材、あるいは地域の方が経験したことを学校に取り入れていくというのを考えてい

る。

さらに、特別活動、つまり学校行事とか学級会活動とか委員会活動が、これからは教科以上に私は大切だと思っており、今年もすごく力を入れている。

「明日、もっとやってみたい学校」というのをメインテーマにして、これには子どもも先生も入る活動だが、子どもたちに信じて任せることを本当にしている。3年生も、遠足というか課外活動を自分たちで計画する。生徒は「先生に任せすぎていた。自分たちのことは自分たちが考えていく」という姿勢になっている。レジリエンスということも言われているので、失敗を教師が恐れない。失敗させてみる。そこから「この計画ではうまくいかないんだ。だからこういうふうに変えてみよう。」という、「やってみただけどううまくいかない」という経験をさせるということが、学校教育で今一番大切なことではないかと。それで、この形式の特別活動をずいぶんやっている。その途中である。これから生きていく子どもたちは、本当に大変だろうなと逆に思う。しかし折れない子、失敗を恐れない子、また立ち上がれる子、そういうふうな子どもを地域と一緒に育てていきたいと考えている。自分も役職定年の年。どこまでできるかわからないが精一杯頑張っていこうかなと、今日委員の皆様のお話を聞いて、また改めて思った次第。

馬場委員長

横島委員、横田委員ともに、まだまだこれからではないか。ぜひ頑張っていたら、というふうに思う。お二人の話を聞いて、さっきの児嶋委員の話ではないが、子どもが途中で学ぶことに頓挫してしまうということは、教育が押し付けられている部分もあると思う。そういう意味で自分の好きなことをとことん追求するようなことが、「探究の時間」とか特別活動の中でできれば、かなり子どもたちの考え方も変わって成長していくのではないかと思う。そういうのを意図的に、どのように作っていくかというのが社会教育としても課題だなと思っている。実際、学校の先生がどんどん減っていつている。島根県の方では、教員が確か40人弱も足りないという状況。再雇用で校長先生をやった人が担任をやったりしている。本当に大変だなという状況。これから大学生の人たちが教員免許条件に魅力を感じるような取組が大事だなと思う。

阪根副委員長

日経新聞で、榎本委員の受章の記事が出ていて、これはすごいなと感じたことがあった。やはり、そういう力は大事だなとすごく感じた反面、もしかすると、徳島県はこういう方をうまく活用しきれてないのではないかというのが課題だと感じている。

これまでも社会教育委員会には、委員長も含めて数多く参加させてもらってきたが、いろいろなことが広がらないというよりは、広げようとしすぎてうまくいかなかったんじゃないのかなと思う。広げるとは巻き込むこと。では、どうやって巻き込んだらうか。みんな情報を知らないとか、それから昔からの古い意識、いわゆる価値観というか、それを変えなければいけない。そこがポイントだろうと思う。

ちなみに私は過去に中学校で「技術・家庭科」を教えていた。1979年に教え始めたときに、文科省指定の男女共習の授業の試行をしてもらえないかと頼

まれ、新採2年目か3年目がやるというのは異例だったが、教育委員会からそう言われて実際にやってみた。もうやってみたときの最初の批判。「なんで、女の子に木工をやらせる。」「なんで、男の子に料理させる。」と批判から入る。そういう批判の中からスタートだったが、運よく、国連の方で男女共同参画関係の話が出てきて、その関係で1990年だったか、学習指導要領で技術・家庭科を男女共習になるという形になった。今から35年前。それ以降何が変わったかという、男子の意識が変わったと思う。今の男の子は、最初からずっとその教育を受けていて、まちがいなく家事に男性が入るようになった。まだまだ不十分だが、教育は大事だ。私の大学でもそうだが、きちんと育休取る職員が増えた。世間だと、未だ、育休を取ることで自分が恥ずかしいという意識が強い。香川県で教育委員会にいたときに育休制度を作るのにちょっと関わった。当時は配偶者産休であったが、誰も取らなかったのが一番に取ってみた。妻が病院に入っている間に、子供の面倒を見て、いかに楽しくかに気がついた記憶がある。男性がサポートすれば、女性は子どもが産める。

なぜ、こんな話をしたかという、もしかすると、子供を育てていくのにもすごくいい環境を作っていくような社会教育や生涯学習というのを徳島に作ったらいいと思っているからだ。若者は、みんな徳島を出て行ってしまふ。学生もそうだ。徳島県で教員をしたいというのは、徳島県で教員だったらある程度、安定とか地位とかそういったことを考えている。民間企業だとやっぱり大阪には出る必要がある。徳島に残るのなら教員というのがある。でもそう考えると、積極的に徳島を選択してもらえよう、残った若い人たちが生活しやすいように、社会教育の中でやっぱり子供をどう見ていくか、子供をどう育てていくのか、そういうのをぜひやっていただくとありがたい私は思っている。

また、最初のあいさつの部分で、「避難所での子どもたちの遊びや学びのサポートに輪島高校と関わっていること」をお話したが、私は、岡山のおもちゃ王国と産学共同研究しており、その資金で30万円相当のおもちゃを輪島高校に送った。これは、輪島高校の「探究活動」での地域創生・子育ての部分で、高校生に使ってもらうためだ。その使い方が分からないと困るので、本学の学生を派遣しようとしている。子供を取り巻く環境の部分に、社会教育をちょっと押し込んでみてもいいのではないか。それは多分、防災だけでなく、いろいろな他の子ども政策につながる。結局、子供中心とよくいうが、さっぱり中心になってない。子供中心とは何かを考えていく社会教育が重要だ。高齢者の方を大事にすることも重要だが、子供を真ん中において、そこに高齢者にも入っていくのが良い。

馬場委員長

子供を中心という考え方に価値観を変えていくという話だった。今までの価値観を持ってどうしても動いてしまいがちになる。もう少し原点に戻る。価値観から考え直してみるというのも非常に大事。また、子ども中心というのは大事で、今までは学校教育と社会教育との連携という視点だったけれども、子供というのを中心におけば、やる事がたくさん出てくると思うので、そのところをどう提言にまとめていくかということが非常に楽しみでもあるし、難

しい点でもあるのかな、という気がしている。

ということで、今日は本当に皆さんから貴重なご意見をたくさんいただきました。事務局で少しまとめてもらい、今後の提言のテーマなり骨子案の方につなげていければという風に思う。これからは先行きが読めない時代で、さらにそういう中で人は少なくなっていく。しかし課題は山積する。したがって持続可能な社会をつくっていく人材をどう育てていくかというのが非常に大事なこと。そこに我々はたぶん知恵を使わなければいけないし、時間をかけていくべきだなというのを改めて感じた。

赤松委員

1点、児嶋委員に教えていただきことがある。

先ほど幼稚園と保育所、認定こども園の関係の話があった。幼児教育の重要性というのを私はすごく思っている。この徳島県教育振興計画の中に、「人格形成の基礎を培う幼児教育の振興・充実」という項目がある。私も県の教育振興審議会委員として、振興計画を検討する会議に参加し、この部分の重要性を指摘させていただいた。今、幼稚園から認定こども園に変わっていったということで、教育振興計画のこの部分は幼稚園を対象としているのかな（認定こども園は該当しないのかな）という点を念頭に、まず、1つは、幼稚園がだんだん認定こども園に変わっていくことのメリットは一体何なのかということと、2つめは、この幼児教育を徳島県教育委員会は充実させていきたいとしている中で、認定こども園となって、教育委員会の所管の枠の外に出てしまうことになり、この場合、どう連携するか、そのつながりを作っていくのかな、という疑問について、教えていただきたい。

児嶋委員  
赤松委員

幼稚園がどうなっていくかという問いでよいか。

実際に、今、私が住んでいる地域でも、幼稚園からだんだん認定こども園に変わっていった。小学校1年生に入学したときに、実は保育園やこども園から直接学校へ上がって、非常に1年生で苦労しているといった話を聞く。そうしたところで、1つは、その認定こども園のメリットって一体何だったんだろうなということ。2つめは、幼稚園と認定こども園両方が混在する中で、そこをどういうふうにつないでいっていかってところ。社会教育で、そしてこの幼児教育を支えていこうというときに、どういう手法というか、どこに向かってどこをターゲットにしてやっていったらいいのかなってところである。

児嶋委員

何年か前に、幼稚園出身の子どもと保育所出身の子どもが小学校に入ったときに学力に違いが出るかといったような研究結果が出た。幼稚園から来た子どもの方が学力が高いというような結果だった。私からすれば、非常に世論操作的で、「やっぱり幼稚園の方が幼児教育がしっかりしている。保育所の方がいろいろ問題がある」みたいなイメージを世間に植え付けるような研究結果だと思う。背景を考えてみると、やっぱり保育所ってというのは保育料0円から6万円まであって、シングル家庭であるとか、非常に複雑な背景を持った子どもが保育料ゼロとかで入っている子どもさんもいれば、極端な話、両親医者みたいな家庭もあって、非常に幅広いという環境がある。保育所は福祉施設なので誰でも受け入れる。どんな条件があっても誰でも受け入れるという前提があ

る。幼稚園の方も公立は選んだりはしないが、私立の方は今でこそ子どもは少ないので誰でも入れるかもしれないが、一応私立の方は面接があったり、お受験があったりする。つまりスタートの時点で違う。それなのにそれを全部一緒にして、先程の調査をやって、幼稚園の方が教育がいいという結果を導き出したところでどうするのかと私は思った。

(2つめ質問の回答になるのだが)、大事なことは、幼稚園に行こうが、認定こども園に行こうが、保育所に行こうが、あるいは認可外のところに行こうが、みんな同じ質の教育を受けられなくてはいけない。小学校に入ったときに「保育所出身の子は」とか、「幼稚園の子は、」とかいうような垣根をなくす、ということが大事。社会教育の関わり方についていうのであれば、違いを意識することはないということになる。

1つめの質問の回答として、認定こども園への変更のメリットについては、1つは、大人の都合で、財政的に自治体が幼稚園と保育所と両方持つのはしんどいので、一緒にしようみたいな事情もある。

実質的には、地域の子どもたちがみんな一緒に学べるっていう仕組みができたということ、それが認定こども園ができたということのメリットの1つ。それからやっぱりさっき言ったように0・1・2歳児がすごく大事で、0・1・2歳児を見ないで3歳児とか4歳児から見ると、先生方は子どもが「できない」ところを見る。「どうして4歳にもなってちゃんと椅子に座ってられないの」とか、「5歳になったら字くらい書けない」とか。でも子どもの育ちはずっとつながっているんで、やっぱり、そういうふうに見てその子なりの育ち方っていうことを支えてあげるっていうことが大事で、やっぱり今の教育の考え方って、みんな同じことが一斉にできるようになるというのではなく、その子らしさみたいなものが開いていくようにするというところで、認定こども園という0歳から6歳までがいるという期間があることによってそういう見方が広がっていくのではないかと考える。もう一つ言うと、世間が教育って思ってることの意味がちょっと狭かったりする。英語を教えることであるとか、レトリックを教える、何とかドリルを教えたりとか、私立の幼稚園に行くとかそういうこといっぱいやってくれるので行くっていうのがあるが、それが違うので、それを正していくっていうことのためにも、やっぱり一つになった方がメリットはあるかな、というふうに私は思っている。お答えになったでしょうか。

赤松委員  
馬場委員長

大変よく分かった。

それでは皆さんありがとうございました。また、次回も楽しい会にしたい。楽しみながらこういう会議をしないといいアイデアが生まれることはないかと思う。次回もお願いします。